令和７年度小松市立丸内中学校　学校評価　１

めざす児童生徒像

自主・自律・活力ある丸中生徒
・主体的に学習や活動に取り組む生徒〈自主〉
・自らを律し、他と協働し、心を通わせることができる生徒〈自律〉
・進取の気性に富み、たくましく生きる力を持った生徒〈活力〉

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	授業改善と生徒指導		①②の割合が100%	①	わかる授業、生徒主体の授業を推進するため、自らのコーディネート力の向上に努めている。	100		99		89		96		①他校の研究発表等で授業を参観する機会を経て、自らの授業力をさらに向上させたいと考える職員が増えている。 ②生徒理解の会を実施し、具体的な状況を全職員で共有し、共通行動をとることができている。教員間の情報共有も円滑になっている。	①次年度も、積極的な他校の授業の参観を継続する。加えて、中核をなす教員の県外視察も積極的に実施していきたい。 ②生徒理解の会の内容をさらに具体化させていき、共通行動を継続していく。
				②	生徒指導において、部会での情報連携から行動連携へ具体的な対応を検討・実行できている。	94		96		100		96			
				集計											

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目										達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		①の割合が70% ②③の割合が80%	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	84				100				①校務DXが効果的であるとともに、一人一人の職員の時間外勤務の削減の意識は高まっている。 ②全ての職員が参画意識をもって業務にあたっている。若手職員や主任も自らの職務に対する意識が高く、仕事に誠実である。 ③校務DXをさらに推進するため、職員の機器活用能力の向上が必須である。	①②今後は教頭と教務主任の業務改善に取り組む必要がある。現在の業務の在り方を整理し、校内システムの修正をしながら改善につとめる。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	83				100					
				③	校務DXの推進に関して自らの課題を明らかにし、改善に取り組んでいる。	84				83					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目		数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	①②の教員の割合が 前期80% 後期90%	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	84				84				①具体的な共通実践はあるが、実践が形骸化している可能性がある。また、生徒の振り返りに対する教師側のフィードバックもさらに必要である。 ②生徒の姿から授業を振り返る授業整理会を継続しており、自分事として考え、議論してきたが、自らの授業改善に生かす点は十分ではないと感じている教員もいる。	①②「見取り」を行うことと「端末を活用すること」という手段が目的化した部分が課題である。基本的な「課題とまとめの整合」「見取りを指導に生かす」という基本に立ち返り、一人一人の生徒に確実に力をつける授業を目指すことも必要である。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	89				84					
				集計											
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①②④の教員の割合が 前期80% 後期90%	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	78	91		13	84	81		-3	①②学習規律を整えることに後期は組織的に取り組んだため、教員の意識は向上したが、生徒の数値は減少した。 ③生徒は中間評価の数値を維持しているが、教員の評価の数値は低下している。前期の数値を受けて、考えを発表する機会を多く設定する教員が増えたが、その分、発表の質に課題を感じる割合も増えている。 ④教員・生徒共に中間評価と変化は少ないが全体的に下降しているのは、話し合う場の設定が減少している可能性がある。 ⑤振り返りシートの取組が定着しており、一定の成果が見られている。反面、生徒と教師の数値の差が大きい。 ⑥中間と大きな変化がないが、この項目は100を目指す必要がある。	①②授業者がねらいを明確にして、力をつける学習課題と学習活動を工夫し、一時間の最後に生徒が達成感を持てる授業とは何かを一人一人の教員が実感し実践できるような学校研究への転換を検討していく。 ③総合的な学習の時間を含め、生徒が端末を活用しながら自らの考えを表現する場の設定を確実に行うことを継続するとともに、教師の適切な指導や価値づけを行っていく。 ④教師が良い聞き手・話し手のモデルとなること、生徒の良い場面を価値づけて全体で共有すること等を引き続き継続するとともに、授業での場づくりにも意識を向ける必要がある。 ⑤生徒の数値が低いのは、振り返りが形骸化している可能性もある。振り返る視点や方法をねらいに応じて工夫する必要がある。学校研究と関連させて再考していく。 ⑥様々なツールを便利に活用しながらも生徒が力をつける授業実践の共有を継続して行っていく。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	89	88		-1	84	91		7		
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	73	78		5	62	80		18		
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	78	87		9	73	82		9		
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	89	81		-8	84	78		-6		
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	89	91		2	89	90		1		
				集計											
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①②③④の平均が 中間…70% 年度末…75%	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	78				78				①教科横断的な視点で作成する際に、他教科の学びについて十分に共有し合う機会が確保できていないため、難しさを感じている教員が多い。 ②年間を通してPDCAが回せていないと感じている教員が多かった。カリマネは今後より大切になることを強く意識する必要がある。 ③教科部会で組織的な取組を継続している。 ④共有の主務者が学力担当者の教務主任であるため、その他の教員は実感が薄い部分があるようだが、校内研修で校区の小学校の状況を共有することで共通理解を図っている。	①カリキュラムマネジメントについて、改めて管理職はじめ教員が正しく理解する場を設定する。 ②教務主任を中心に、カリキュラムマップを実効性のあるものにするために、年度末に見直しを図る。 ③今後も取組の継続を行う。 ④学力向上担当者以外との情報共有の場の創出を検討するとともに、まずは、各教科で小学校で身につけた力について創出する。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	74				67					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	89				89					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	72				62					
				集計											
		学習方法	①②の割合が80%	①	児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行っている。	89	86	93	4 -7	89	80	95	6 -9	①②授業では、自己決定させることを意識する教員が少しずつ増えている。今年度から新設した帯タイムは効果的である反面、自学ノートを学校で用いて学習する方法をとったことが家庭学習の時間を減らしているという意見もある。	①②帯タイムの在り方を見直すとともに、家庭学習にどのように端末使用を用いていくことが有効かについても研究する必要がある。
				②	児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を活用している。	83	82			78	76				
				集計											